

極早生ウンシュウミカンの若木に対する 施肥管理の省力化

[要約]

極早生ウンシュウミカンの若木に対する被覆複合肥料の年1回施用は、慣行の有機配合肥料や緩効性化成肥料の年2回分施とほぼ同じ肥効があり、施肥管理の省力化が可能である。

[担当者] 品質環境部 田端洋一・横谷道雄・菅井晴雄

[背景・ねらい]

施肥管理の省力化を目指して、高畝（畝幅2m×長さ16m）の緩傾斜地園で被覆複合肥料の年1回（8月）施用と慣行肥料の年2回（3月、10月）分施の肥効を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 被覆複合肥料の年1回施用の土壌中無機態窒素は、4mg/100g以下の低水準で推移し、葉中窒素は、有機配合肥料や緩効性化成肥料の年2回分施とほぼ同じ値を示す（図1、2）。
2. 被覆複合肥料の年1回施用の収量は、有機配合肥料の年2回分施と同じであり、緩効性化成肥料の年2回分施より多く、果実品質には差が認められない（表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 若木の極早生ウンシュウミカンへの施肥管理省力化方法として利用できる。
2. 成木園でも適用できるかの検討が必要。

[具体的データ]

表1 試験区の構成

試験区	施肥量 (N成分kg/10a)									備考
	1996年			1997年			1998年			
	3月下旬	8月上旬	10月	3月下旬	8月下旬	10月	3月下旬	8月下旬	10月	
有機配合肥料区 (みかん配合2号 8-6-5)	4.0		6.0	4.8		7.2	4.8		7.2	1994年に「日南1号」の2年生苗を定植。 1区 32m ² の2連制で実施し、調査樹は各連 4樹。
緩効性化成肥料区 (IB複合添加16-10-14)	4.0		6.0	4.8		7.2	4.8		7.2	
被覆複合肥料区 (ロング 14-12-14)**	4.0*	10.0			12.0			12.0		

注)* 試験開始年(1996年)だけ有機配合肥料を施用。

** スーパーロング(424-140)とロング(424-180)を6:4の割合で混合施用。

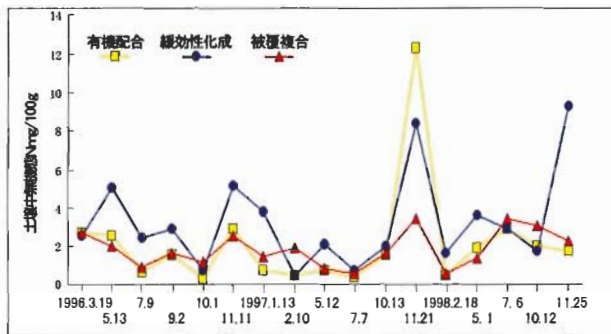


図1 土壤中無機態窒素の推移

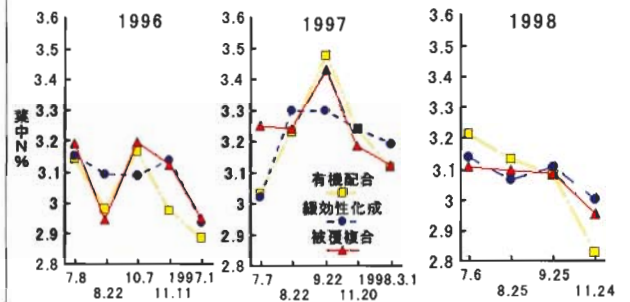


図2 葉中窒素含有率の推移

表2 果実品質及び収量

	果皮割合(%)			糖度			酸(%)			収量(kg)			1果平均重(g)		
	1996	1997	1998	1996	1997	1998	1996	1997	1998	1996	1997	1998	1996	1997	1998
有機配合	18.9	19.8	23.4	9.8	8.8	10.7	0.93	0.87	0.84	6.56	9.14	12.76	136	138	109
緩効性化成	21.1	22.1	24.3	10.4	8.7	10.6	1.03	0.84	0.95	6.03	7.57	9.18	129	145	124
被覆複合	20.5	21.0	22.9	9.5	8.6	10.2	0.89	0.82	0.80	6.77	8.19	12.44	136	127	123

1996年10月14日、1997年10月23日、1998年10月15日に調査を行った。